コロナ禍の子ども食堂

「コロナで死ぬより、餓死するリスクの方が高いのではないかと考え、活動しています。コロナよりも美味しいごはん、人との交流、楽しい思い出づくりを優先しています。もちろん感染対策は徹底しています。」

これは、2020 年 2 月末、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、全国の小中学校、高校、特別支援学校が一斉休校している間にも関わらず、あるいは、だからこそ、子ども食堂を開催し続けている愛知県一宮市の子ども食堂の運営者の声である。大きな災害や戦争など極端な社会変動の時期には、人と人とのつながりも大きく変化することがある。コロナ禍が子ども食堂に与える影響を記録すること、とりわけ、子ども食堂を結び目につながった人、モノ、組織がコロナ禍でどのように変化しているのか、愛知県の子ども食堂 140 箇所への調査を通じて、これらを記述し分析することがこの報告書の目的である。

当たり前かもしれないが、コロナ禍の影響はすべての子ども食堂に等しいわけではない。2020 年 4 月 16 日、全国緊急事態宣言後、感染症対策のため、人との距離が強調されるなか、会食型の子ども食堂が開催できているところと開催できずにいるところがある。何がこの差を生み出しているのか。2020 年 5 月 25 日、緊急事態宣言解除後、会食型の子ども食堂を再開できている子ども食堂にはどのような特徴があるのか。また、コロナ禍により、会食型の子ども食堂から、企業や家庭で余った食料を集めて困窮世帯に配るフードパントリー（食材・食品のお裾分け会）に活動を切り替えているが、こういった活動を行っている団体とそうではない団体にはどのような違いがあるのか。

「コロナ禍の中、一人親家庭を初め弱者所帯が大きな影響を受けています。公的施設の利用が出来なく止むえずフードパントリーで食材の配布をしていますが、食堂再開後もフードパントリーの必要性が有ります。今後両方並行して運営が必要と思います。最終的には行政の支援が今ほど必要な時はないかと思います。」

「やめることのリスクのほうが大きいと考える（つながりがなくなること）。コロナ前より家庭状況の格差が大きくなっていると感じるが、本当に必要な家庭に届きにくい。本人たちが出づらいことと、個人情報のことで、情報は公からはもらえないことで足踏み。コロナ禍で子ども食堂がクローズアップされるのは良いが、方向性を見失わないようにすることも大切、物をプレゼントして大人の自己満足に終わってはもったいない。いつでも立ち寄れる所（出づらい子が）が作りたい。」

上は日進市、下は半田市の子ども食堂の運営者の声である。コロナ禍でも、子ども食堂でつながった方々とつながり続けていることの意義と課題、必要とする家庭に届けることの難しさが述べられている、また、行政との連携と支援が必要であること、さらに、いつでも立ち寄ることができる場所をつくりたいと希望を語っている。このようにコロナ禍が子ども食堂に与える影響は様々であり、子ども食堂を運営し、また支えていくために必要

なことも多様である。それらを記録し、行政や企業などが必要な手を差し伸べることができるようにしたい、これがこの調査の目的である。

「コロナで大変な状況でも、安心して過ごせる時間と場所を子どもたちに持ってもらいたいと常々思っています。室内がダメなら外で遊ぼう！過ごそう！と、コロナという制約から、新しいことが始まり、新しい発見もありました。」（名古屋市緑区の子ども食堂）

「定例の形に早く戻れることを祈り、この状態で私達は何ができるのかを常に考えて話あっています。細く永く、これからもやり続けます。」（豊山町の子ども食堂）

「早く気持ちよく開催できる環境であってほしい」（瀬戸市の子ども食堂）

こうしたコロナ禍の子ども食堂の声に耳を傾けるために、一昨年と昨年に続けて、今年も愛知県内の子ども食堂の運営者と寄附者を対象にアンケート調査を行った。コロナ禍の困難な状況の中でご回答いただき、改めて御礼申し上げげたい。不十分なところ、至らぬところ、多々ある。本格的な分析と追加の聞き取り調査を、二度目の緊急事態宣言が解除された後に行う予定である。まずは速報値としてご報告させていただきたい。

2021 年 2 月 25 日

成元哲

われらのこどもプロジェクト